

【論文提出者】 社会文化科学教育部 人間・社会科学専攻 認知哲学・心理学領域
氏名 鈴木 暁子

【論文題目】 認知バイアスの発達的变化及び認知特性との関連性

【授与する学位の種類】 博士（ 学術 ）

【論文審査の結果の要旨】

鈴木暁子氏の博士論文「認知バイアスの発達的变化及び認知特性との関連性」は、人間の意思決定に影響を与える認知バイアスが、発達の変化や発達障害傾向とどのように関連するのかについて、実験的手法を用いて解明することを目的としたものである。

認知バイアスとは、種々の意思決定に際して、無意識にはたらく思い込みのことであり、災害におけるリスク認知などの面から注目が集まっている。これまでに、成人を対象として、特定の認知バイアスが生じやすい課題を用いて、どのような判断の誤りが生起するのかといった研究は数多く行われているが、どういった認知バイアスが発達障害傾向等の認知特性と関連しているのかについて検討した研究は乏しい。また、小児や高齢者を対象とした研究は未だ十分に行われておらず、生涯における認知バイアスの変化は未解明である。そこで本研究では、小児にも適用可能な認知バイアス課題を作成し、高齢者を含めた生涯発達における変化や認知特性との関連性についての検討を行っている。本論文は、全7章で構成されており、第1章では、人の意思決定と認知バイアスに関する先行研究を概観し、本研究で作成する小児に適用可能な4種類の認知バイアス（確率バイアス、結合バイアス、認知的熟慮性、フレーミング）について定義づけを行っている。また、加齢や認知特性による影響を考慮した研究仮説を述べている。第2章では、小児に適用可能な認知バイアス課題の作成を行っている。第3章では、小児における発達障害傾向との関連性について検討を行っている。第4章では、小児と成人を対象として認知バイアスの発達的变化について検討を行っている。第5章では、高齢者も対象として、認知バイアスの生涯発達の変化について検討を行っている。第6章では、推論過程における認知バイアスについての考察を行っている。

本研究によって得られた主要な成果として、非認知バイアス課題9問を含めた全21問の小児に適用可能な認知バイアス課題を完成させた点が挙げられる。また、不注意性やコミュニケーションの問題といった発達障害傾向が認知バイアス課題の成績と関連することが明らかとなり、認知特性が認知バイアスの推論過程に影響を及ぼすことが示唆されている。さらに、思考や行動を制御する認知システムである実行機能の未発達な小児はリスクを選好する傾向があること、高齢者は時間をかけて熟考しポジティブな表現を選好するといった特徴が明らかとなり、生涯発達によって認知バイアスに関わる推論過程が変化することが示唆されている。

以上、小児向けの認知バイアス課題の作成、発達障害傾向との関連や生涯にわたる発達的变化による差異を明らかにした本研究は、人の意思決定に関わる認知バイアスのメカニズムの解明に大きく貢献するものと思われる。特に、小児期から高齢期までのダイナミックな生涯にわたる認知バイアスの発達的な変化については従来報告されておらず、世界で初めての知見である。また、すでに本研究に関連した学術論文が国内誌で1件、国際誌で1件ほど採択され、学会発表も行っている。また、今後、学校教育やリスク認知などの種々な分野への波及効果も大きいと予想される。以上のことから、本委員会は、本論文を博士論文として適格であると判定する。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、令和3年12月24日（金）（14時40分から16時10分）に学位論文審査委員会委員4名の出席のもとでオンラインにて実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表がなされた後、各審査委員との間で質疑応答が交わされた。いずれの審査委員の質疑に対しても、専門的な学識とデータに基づく適切な応答がなされた。

また、令和4年1月22日（土）（10時から11時）に開催された学位論文公開発表会においては、まず博士学位論文の主旨について発表が行われ、その後質疑が行われた。審査委員以外の出席者からの質疑に対しても適切かつ明快な応答がなされた。

以上から、当該論文の提出者である鈴木暁子氏は、その研究テーマ及び関連領域に関して優れた学識を有し、自立して研究を行う能力を十分に有すると確認できたため、審査委員会は、同氏に対して博士（学術）の学位を授与するに相応しいと判定するに至った。

【審査委員会】

主査 安村 明
委員 藤田 豊
委員 寺本 渉
委員 田中 朋弘